

平成 26 年度富山大学生涯学習推進懇話会

- 日時** 平成 27 年 2 月 12 日（木）10：00 ～ 11：30
- 場所** 富山大学事務局 大会議室
- 主催** 富山大学地域連携推進機構生涯学習部門
- 趣旨** 富山大学生涯学習推進懇話会要項に基づき、学外有識者から意見を聴き、多様化・高度化する学習状況や地域のニーズに対応した効果的な学習事業を提供し、生涯学習事業をより円滑に推進するとともに、その実施状況について評価を受けるため開催する。

出席者

委員、委員代理

- 木村 博明（富山県教育委員会 生涯学習・文化財室長）
- 荒井 克博（富山県民生涯学習カレッジ 学長）
- 中西 彰（富山県生涯学習団体協議会 会長）
- 飯野 芳己（日本放送協会富山放送局 副局長）
- 島田 芳一（富山市市民学習センター 所長）
- 本吉 和人（北日本放送株式会社 報道制作局次長）
- 本田 光信（株式会社北日本新聞社 編集局報道本部長）
- 米谷 和也（富山県立小杉高等学校 校長）

富山大学

- 丹羽 昇（理事・副学長 地域連携推進機構長）
- 竹内 章（地域連携推進機構 生涯学習部門長）
- 藤田公仁子（地域連携推進機構 生涯学習部門 副部門長）
- 仲嶺 政光（地域連携推進機構 生涯学習部門 准教授）

1. 開会の辞

富山大学地域連携推進機構の竹内生涯学習部門長より、以下の挨拶があった。

富山大学では 1996 年以来、20 年近く大学改革事業を行っており、その間、毎年度、学外の方に年度の活動報告を行い、報告に対して、あるいはそれ以外の広い問題に対してご意見・ご提言を頂いている。本日は忌憚のないお叱りとご指導を頂きたい。

2. 出席者の紹介・資料確認

3. 座長選出

富山県生涯学習カレッジ学長の荒井克博委員が座長に選出され、挨拶があった。

4. 報告

富山大学改革プランについて

丹羽理事・副学長／地域連携推進機構長より、第3期中期目標期間に向けた富山大学改革プランの方向性について報告があった。

5. 議題

(1) 平成26年度生涯学習部門事業・活動報告について

(2) 富山大学生涯学習の在り方についての評価と提言について

議題(1)において、竹内生涯学習部門長より、生涯学習部門平成26年度事業、富山大学公開講座実施状況について説明があった。

続いて、仲嶺准教授より、公開講座とオープン・クラスの受講者内訳、受講生アンケートの結果と自由記述について報告があった。

藤田生涯学習副部門長より、「生涯学習部門受講生オープンサロン」について説明があった。

仲嶺准教授より、「富山大学と富山県立小杉高等学校との高大連携事業」の実施報告があった。

藤田生涯学習副部門長より、「富山大学サテライト講座」について報告があった。

仲嶺准教授より、「北陸4大学連携まちなかセミナー」「富山大学・生涯学習ワークショップ2014」「高志の国文学館文学講座」の実施報告があった。

藤田生涯学習副部門長より、専門講座「活用実践コース」の報告があった。

仲嶺准教授より、地域との連携を強めるための取り組みとして「富山県いきいき長寿大学」「経営者大学」「コラボフェスタ2014」について報告があった。

藤田生涯学習副部門長より、「講師紹介・生涯学習相談」「自治体等との連携」について説明があった。

議題(2)において、藤田生涯学習副部門長より、生涯学習部門の平成26年度の活動状況、次年度へ向けての取り組みについて報告があった。

6. 閉会の辞

富山大学地域連携推進機構の竹内生涯学習部門長より、以下の謝辞があった。

本日は長時間にわたり、貴重なご意見・アイデアをいただき、感謝申し上げます。私どもの今年度の活動、考え方に対してご理解いただき、内容的には私どもの思うところを評価していただいたと受け止めている。本日頂いたご指摘・ご意見については、整理・反すうして次年度の活動に役立てていく所存である。今後ともご指導を願いたい。

意見交換

(1) 平成 26 年度生涯学習部門事業・活動報告について

(米谷委員) 県の教育委員会からは、今日は荒井学長が座長であるため、県民カレッジにも触れながら今回の報告について話をしたい。昨年、富山県立雄峰高等学校に併設した県民カレッジ富山地区センターが開設され、県内の四つの地区センターと県民カレッジの本部という、私どもの拠点が全て完成し、生涯学習推進に係るハード面が整備されたと考えている。

そうした中で、富山大学には連携講座で県民カレッジとの連携を進めてもらい、特に、今年度からオープン・クラスを新たに連携講座に全て位置付けてもらって大変ありがたい。現在オープン・クラスを受講して県民カレッジの単位を取得した方が 11 名、述べ 23 名と伺っているが、こうした取り組みについても大変うれしく思っている。

また、「高志の国文学専門講座」は県民カレッジの中でも目玉事業だが、その中に藤田先生が直接入って、総括の授業までしてくださり、感謝している。ぜひこうした連携もこれから進めていただきたい。藤田先生は中でも公民館が専門分野だと伺っているが、現在、県では公民館ふるさと教育の推進を進めており、そうしたところでも専門的な講義を頂いており、ありがたいと思っている。私も一度富山地区センターのヘルン文庫の富山大学視察講座に参加したところ、入りきれないぐらい、100 名近くの方が参加していて、皆さんは、ただそこで学びたいというだけではなく、横のつながりを求めており、一緒に交流ができることに大変満足しているということを実感した。

(大学側：藤田) 公民館の方からは、実際のところヘルン文庫を見学するというよりは、大学の中を見学したい、大学の正門から入って自由に闊歩したいという要望があり、それに対応した。ヘルン文庫見学という大義名分は付けたが、学食で食事してもらい、秋口のいい天気の中でメーンストリートを歩いてもらい、楽しく過ごしてもらった。そのときに、「正門から自由に入っているの?」「学食は自由に使っているの?」と、学食がとても好評だった。学生と一緒に食べられるということと、学食のレシートに、自分の食べたものが何キロカロリーと書かれていることに対して興味を持たれて、「こういうところで学生は食事しているのだね」とおっしゃっていた。本学のオープン・クラスとは別に、学生生活において学生と触れ合えると、とても好評だったため、今後とも続けられたらと考えている。

(島田委員) 富山市民大学で 78 コースを設定しているが、富山大学には講師の面で随分とご協力を得ている。あらためてお礼を申し上げたい。

公開講座について、質問を含めて、感じたことを 3 点ほど話したい。今年度 8 コースが休止になっているということで、講師の先生のご都合はやむを得ないが、募集がゼロだったのか、それとも 1～2 名で中止だったのか、その辺の基準があれば教えてもらいたい。私どもは、費用対効果を考えると 3～4 名で開催するのは非常にもったいないいつも思っている。

2 点目は、公開講座の中に各年代層が入っているというのは、公開講座の趣旨に合致していて、とてもいいと思うが、残念ながら受講者の伸び悩みがあり、次年度は品質ヘシフトするという話だった。とてもいい方法ではないかと思う。

3 点目は、アンケートの効果・影響の中に、知り合いが増えたという反応がとても多かったように思う。100 名当たりを単位にして講座を開くと、こんな反応は絶対に上がってこない。

定数が適度にいいことや、講座の雰囲気がいいこと、「生涯学習部門受講生オープンサロン」などがいい効果を及ぼしているのではないかと。この友達が増えたチャンスを生かす方法はないだろうか。うまく受講者を組織すれば、講座への応援隊にもなるし、いろいろな意味で力を発揮してくれるのではないかと思いますので、そのような芽があるのか、可能性としてはどうなのかについて、お話を伺いたい。

(大学側：仲嶺) 1点目について、受講希望者が1人の場合はマンツーマンになってしまうので中止になるが、少ない場合はそれでも開講するかどうかを先生と相談して決めている。

(大学側：藤田) 講座の開設は、費用面は昨年度当たりから学内も厳しい目があるので、それは説明した上で、担当講師と相談しながら一つ一つどうするか決めている。今年度の休止講座については、意外と人が集まると思っていたものが休止されたものもあれば、公開講座を開設したときから一生懸命やってくれていた人気講座の講師が体調を崩されて、開講日に休止と決めたものもある。集まったもの、集まらなかったもの、事情があったもの、それぞれであった。

幅広い年代層については、昨年度から、必要なところに必要な情報をという形で取り組んでいるため、ボランティア団体や若者が集まる場などに、私が何かでお邪魔するときや、参加者や講師として行くときに、PRのチラシを手持ちで持ち込んで、そこから各団体への配布などの協力を願っている状況である。そのため、シニア層に限らず若い方にも少しずつ参加してもらっているのではないかと考えている。

また、受講者数の伸び悩みは、リピーターが多くなってきているという背景があるので、今年度も悩んでいる面はあるが、次年度に向けた新しい取り組みを開始している。価格帯の問題が出ているため、公開講座の価格をできるだけ低い価格帯に設定し、現代的な課題に対応できる講座を生涯学習部門から提案して、3～4人の講師がオムニバス形式で、最も少ない時間で公開講座を展開することにも取り組もうと考えている。

仲間づくりの面は、せっかくの機会であるため、受講者同士が話せる場面や交流できる場を講座の時間の中につくってもらようという講師に依頼し、講師から少しずつ働き掛けてもらっている。その応援隊のチャンスを狙っている。こちらは生涯学習応援隊(仮称)をつくろうとしており、何かネットワークができないかを模索しているところだ。

次年度は、まだ本格的にプログラムは組んでいないが、もくろみとしては、富山大学生涯学習セミナーということで、新しく4～5回のを設けて、その中で参加・参画型の講座を二つぐらい設定して、今、受講者が友達同士で、いろいろな形で何かしたいという形になってきているところをなるべく巻き込みながら、次のステップに行けるようにと考えている。例えば、公民館の授業で学内を闊歩したいとなったときに、案内してくれる方や、学生と一緒に活動してくれる方など、そういう形で大学ならではの資源を使いながら何か活動できないかも考えつつ、一つ一つステップを踏み出していきたい。

(荒井座長) アンケートの意見を読んでも、公開講座、オープン・クラスともに大変好評で、積極的な姿勢がうかがえ、肯定的な意見が多いようである。難易度というのは大変難しいと思うが、6割以上の方々が難易度についても「ちょうどいい」という回答をしている。

(本田委員代理) 先ほど公民館の事業を支援しているという話があったが、地域の公民館の事業をバックアップするケースは年間どのくらいあるのか。

(大学側：藤田) 中西先生の方がよくご存じだと思うが、相談という形では、年間10本以上ある。ただ、本学の教員を講師として紹介する形では、資料「生涯学習部門活動報告」の「平成26年度講師等紹介実績一覧」に出ている程度なので、実際のところ、何に取り組んだらいいのだろうか、今の話題は何だろうかという相談を受けて、公民館プログラムを使う形でまず第一歩のところを支援している形ではないか。メール、電話、いろいろな形で相談が来る。

(本田委員代理) 拝見すると年配の方の取り組みが多い気がするが、公民館は、最近少なくなっているが、小学生や中学生など若い人からお年寄りまで含めた幅広い方々が活動するところなので、こういう支援を手厚くするといいと思い、質問した。私の妻が実は公民館で働いていて、いい先生がいないだろうかといつも頭を悩ませている。

(大学側：藤田) いつでもご一報いただきたい。

(2) 富山大学生涯学習の在り方についての評価と提言について

(荒井座長) 時間も迫ってきたので、もちろん議題(1)についてでも結構だが、議題(2)も併せて議論をお願いしたい。

(中西委員) 私はここには生涯学習団体協議会という立場で来ているが、公民館の方でお世話になっていることを最初に感謝申し上げる。

1点目だが、冒頭に丹羽機構長から説明があった改革プランの中で、教職大学院について触れられていた。未確定だと思うが、入学定員14という数字もあった。これはどういった方々を対象にしたものかを伺いたい。もともと県の公立学校教員の専修免許取得のための配慮を県と連携した形でお願いしていたが、そことの関連、あるいは現在ある人間発達学研究科との関連の二つを合わせて、どのようなビジョンかを伺いたい。

2点目は、初めての人とリピーターをどのように捉えるかということである。私は、生涯学習の分野も、公民館も、講座を受けにきたりサークルに入ったりする人を見てみると、同じような悩みを抱えているように感じる。悩みと言っていいのかどうかも含めて話をしようとしているのだが、例えば富山県にこれから新幹線が通って、リピーターを増やしたいという言い方をするときには、このリピーターというのは何回も来てほしいという意味でプラスの評価を得る言葉だが、この生涯学習や公民館のときに、リピーターという言葉は、受講者の固定化と同義語になってしまう。

初めての人を開拓したいということになるのだが、例えば先ほど、ダイレクトメールが情報入手手段として非常によく使われているというデータがあった。ダイレクトメールが機能するということは、逆に言うと、あらかじめどういう人がいるという情報があって、そこへ送ることなので、その時点で早くも固定化が起こる可能性がある。その部分をどのように工夫しているかを伺いたい。

3点目は、公開講座、サテライト講座、北陸4大学連携まちなかセミナーという何通りもの仕掛けがあるが、似たような方々があちらにもこちらにも行っている可能性がある。その辺のクロス集計というか、それぞれ共通して行っている人がどれぐらいの割合いるかも見る必要があるのではないか。

(大学側：丹羽) まず、教職大学院について申し上げる。まだ正式認可ではないが、現在、前向きに実現の方向へ動いていると思っている。設置の目的は、実践的な指導力を備えた新人教員の養成、現職教員を対象にスクールリーダーをつくることである。子どもたちの数が減っている状態にあり、将来的に学生数がどんどん減っていくことになるため、富山大学としては人員の確保も考え、現職教員のスキルアップを目的として、県の教育委員会の皆さんと連携した形の教職大学院をつくる。

本学の教育学部は改組してゼロ免の人間発達科学部になったため、教員の養成機能を全学で果たすことになっている。この教職大学院をつくることにより、その機能を強化したいと考えている。人数や組織等は、これからさらにもう少し詰めなければいけないところもあるため、確定的な数字は今のところはお話しできないが、文科省は各県一つずつ教職大学院をつくりたいという方針で、富山県は教育学部がなくて空白になっていたのだが、そういう意味で、県との連携の中で、特異な形だと思うが、教職大学院の設置に向けて努力しているところである。

(大学側：藤田) リピーターについては、語学の講座など、固定されないように、次のステップへの学びの講座を展開している。同じ学びを繰り返すのではなく、必ずステップアップできるようなコース設定をしている。

オープン・クラスについては、何回も同じ講師の同じ講義を聞くケースが出てきている。担当講師からは、毎回同じではという話になってしまうので授業に差し障りがあるという意見があり、また学生に対して「この次はこうで」と先走りするような発言をする受講生も中にはいる。そのため、オープン・クラスの受講は1回限りであるという制限を入れている授業もある。

リピーターはステップアップへの学びを用意することが最大の策かと思っているが、やはり教養講座なので受講者の固定化が起こってくる。そのときには先輩の受講生として対応してもらおうようにしている。要するに、初めてで心配な受講者もいるので、そのときに、「この講座はこういう形で展開するのだよ」という形でたくさん世話を焼いて、先輩の態度を取ってもらうようにしている。講師にはその旨を了解してもらい、水を向けるという形を取っている。必ず繰り返しの内容ではなく、講座も変えてもらっている。例えば最終回のときに、今まではこういうことをやっていたが、来年度講座を設定するときにはこういう内容に取り組みたいという形で、テキストの紹介をしてもらうなど、講義の内容を紹介して必ず次のステップに行けるようにする。ただし、初めての方が入ってきた場合にはフォローが必要なので、それには対応してもらっている。特にあまりにも専門的な分野で差が出た場合、受講生と相談してもらい、講師のボランティアで空き時間に少しレクチャーするなど、補講のような形で取り組んでいる講座もある。

(飯野委員代理) ステップアップは受講者からすると重要だろう。いろいろな講座を用意していて、だんだんレベルが上がっていくという話があったが、受講者からアウトプットする機会がほしいという声が挙がっている。次年度はどのようなことを計画しているのか。例えば発表の場を

設けたり、調べた結果をまとめた冊子を指導してつくったりするようなどころまで考えているのか。そういうところまでいけたら素晴らしいと感じた。

また、どれだけ新しい受講者を入れられるのかについてだが、最近ネットでオープンカレッジなど大学の講座を動画で見られるようになってきている。もしかしたら富山大学でも YouTube などで行われているのかもしれないが、そのようなものでさわりが実際に見られると、感じが分かり、申し込みやすくなるのではないか。

(本吉委員代理) いろいろな展開をされていると昨年も伺ってすごいと思っている。大学というのは、専門性と多様性を同時に満たしていくことは非常に難しいと思うと同時に、例えばオープン・クラスは学生と一緒に学び直すするという非常にいい機会だと思うのだが、中身が具体的にできてこない。具体的にどのような事柄を学び直せるのかという中身が伝わるような形にできればいい。しかし、一般教養で学生も一緒であるため、難しいのだろうか。

最初に丹羽副学長が教職大学院について説明された際、富山型教員という言葉があったが、これはどういうものをイメージしているのか。私は富山にいる人たちが富山を知ることは非常に重要だと思っている。例えば、先ほどヘルン文庫の話も出たが、そういうものを具体的に学んでいくなど、はっきりとした方向性があれば、PR する際にもよりリーチするのではないか。

大学を開き、さまざまな形で産学官が連携して、いろいろな方が大学に参加・コミットしていくことは非常に素晴らしいと思うのだが、一方で、例えば大学にサロンができて自由に入れるようになったときに、その辺のリスク・危機管理はどうするのかという不安もある。話があっちに行ったりこっちに行ったりして恐縮だが、大きなさまざまな問題を抱えているのではないか。

北陸4大学連携まちなかセミナーでは薬物依存を取り上げたということだが、例えば、今ニュースで流れている ISIL に関する事柄に対して一般の方も関心が強い。そういうものに対して、生涯学習という場で伝えていけるか分からないが、大学はどのような形で取り組んでいくのか。一般的な教養として考えたときに、イスラム世界の文化はどのようなのか、実際に富山にもイスラムの方々はいらっしゃるし、大学はそういう方々に対してどう向かい合っていくのか、文化的なものだけではなく、外国語としてのアラビア語の取り組み方をどうするのかなど、そういうことをより分かりやすく見える形にすれば、PR するにしろ、伝えるにしろ、よりストレートに伝わるのではないか。

(荒井座長) この後、米谷委員に一言ご発言いただき、お三方の提言等について、一括してお答えいただければと思う。今年は特に高大連携で小杉高校の生徒の受講者も多かったが、そのあたりの事情等をお話しいただきたい。

(米谷委員) 小杉高校は生徒が大学の講義を受けさせていただき、富山大学にはお世話になっている。生徒にとって大変いい機会になっている。今回は20名を超える受講者がおり、芸術関係では、芸術文化学部へ推薦合格した生徒もいれば、理系では県立大学の工学部へ合格した生徒もいる。また、理系の生徒が、市民生活と法という講座を受講して法学に関心を持ち、本当は富山大学の経済学部の経営法学科へ入れればよかったのだが、事情があって県外の指定校に決まった。受講した生徒が自分の進路をさらに考える機会になり、本校としては、今年度は特に成果があったと思っている。今後またこういう機会を提供いただければありがたい。本校とし

でもこういった機会を積極的に活用したいということで、3月にスプリングセミナーで富山大学の先生に来ていただいて受講体験し、それでまた4月以降の講座について、担任、学年等で働き掛けて、ぜひ参加しようということで今進めている。今後ともよろしくお願いする。

(荒井座長) それでは、先ほど来のご質問にお答えできる部分でお答えいただきたい。

(大学側：丹羽) オープン・クラスについて、教養科目だけでなく、専門科目の中でも積極的にオープン・クラスとして募集している講師もいる。例えば経済学部では、北陸銀行の元支店長が、だいぶお年を召しているのだが、ずっとオープン・クラスを受講していて、どうしてか聞いたら、「どういうふうに動いているか知りたい」ということだった。このように積極的に来ておられる方もいる。そういう意味でスキルアップになっている部分はあるのだろう。若い人たちはそういう形で専門科目も受けていると聞いている。

教職大学院について、富山型はどこが違うのかということだが、これは特色を出すために富山型と言っているのだろう。他の大学だと教育学部を前提としてその上で養成をさらにつくっていくのが普通だが、本学は教育学部がなく、人間発達科学部なので、県教育委員会と密接に連携して、協働してあらためてつくっていくというのが大きな特色である。そういう意味では県に非常に大きくご支援いただいている。そこから人員を出してもらったり、あるいは県の現職教員を積極的に派遣してもらうようなシステムになっているので、そのようなことから富山型という形になるだろう。その内容については、もし補足があれば後ほどまたご紹介したい。

(大学側：藤田) 受講内容について見える化ということだが、オープン・クラスについてはシラバスをウェブ上で公開しているため、そちらの方である程度の部分は学生と同じものが見られるようになっている。また、オープン・クラスを受講する際には、必ず担当教員のサインや印鑑が必要になる。内容については担当教員と、学生よりは密に話せる場が設けられており、「私はこれくらい学んできたのだが、この程度の学びで付いていけるか」「こういうことを学びたいのだけれど」という形で、双方向でよく話ができる場になっている。また、何かあればサロンで私たちが話を伺っている。今のところコミュニケーションが全てだと考えている。

イスラムなどもろもろのことだが、大学に現代的な話題に対応できる教員がいるのかどうかからのスタートになる。話題になる現代的な課題や地域のニーズなど、いろいろなテーマが存在しているが、それに対して私たちがどういう形で教員とのコーディネートをしていくのかということなので、900名以上いる教員の専門を私たちが把握しながら地域に紹介していくことが、大学開放の一環になっていくので、それがこれからの仕事だと思っている。今までいろいろな形で見える化してきたが、今後も私たちも努力して取り組んでいきたい。またご意見があれば今回の場に限らず、声を届けていただければと思っている。

(荒井座長) 委員の皆さまにはまだまだおっしゃりたいことがたくさんあると思うが、予定していた時間が来たのでこの辺で終えたい。貴重なご意見をたくさん頂き、また、11月に実施されたワークショップで生涯学習に熱心に取り組んでいらっしゃる方の生の声がたくさん届けられているため、それらをくんで、富山県にとって大事な生涯学習の拠点とも言える富山大学の生涯学習部門が今後ますます発展・充実することを祈っている。